

2008

函館学

キャンパス・コンソーシアム函館
合同公開講座

函館学2008

講義資料

平成20年11月29日(土)午後2:00~3:30

「蠣崎波響の漢詩の世界」

北海道教育大学函館校教授 高木 重俊

会場:ホテル法華クラブ函館

主催 キャンパス・コンソーシアム函館

〔蠣崎波響略譜〕

明和元年（一七六四）

二年（一七六五）

天明元年（一七八一）

六年（一七八六）

寛政元年（一七八九）

二年（一七九〇）

三年（一七九一）

松前十二世藩主資廣の五男として誕生。

蠣崎廣武の嗣養子となる。

家老職見習いとなる。18歳。

第一回上洛。23歳。

メナシ、クナシリのアイヌ蜂起。

「夷酋列像」完成。27歳。

第二回上洛。「夷酋列像」を光格天皇の勲覽

に供す。釈慈周（号は六如）・赤松滄洲・皆

川淇園・高山彦九郎・釈大典・西山拙斎・釈

慈延（号は大愚）・三宅嘯山らの知遇を得る。

讃岐金比羅神社に参詣。28歳。

六年（一七九四）

第三回上洛。菅茶山・橘南谿・伴高蹊・村瀬

栲亭らの知遇を得る。八月、六如・茶山・南

谿・高蹊・大原吞響らと巨椋池で月見の舟遊

び。31歳。

十二年（一七九九）

第四回上洛。六如を白雲山寺に訪う。36歳。

六如歿す、68歳。松前廣長歿す、65歳。生母

文字歿す、66歳。

六月末、柴野栗山邸で菅茶山と再会。七月初

茶山・犬塚印南・伊沢蘭軒・木村文河・今川

槐庵・銅雲泉らと隅田川で花火見物の舟遊び。

波響、「墨水舟中図」を茶山に送る。41歳。

二年（一八〇五）

二月、中田察堂編『名花交叢』刊行。42歳。

三年（一八〇六）

春、竹所吟社「梅花十詠」の発会。43歳。

四年（一八〇七）

二月、菊池五山『五山堂詩話』巻一に、波響

の詩が紹介される。七月、松前藩の梁川移封

五年（一八〇八）

が決定される。44歳。

波響 執政家老となるか。四月、松前を発つ

て梁川に赴く。この年、『五山堂詩話』巻二

に『梅花十詠』の記事が掲載される。45歳。

九月、江戸出府中の茶山に長文の書簡を送り、

詩の添削、特に「江戸風の臭気」を除いてく

れるよう要請。51歳。

文政元年（一八一八）

十一月、岡本花亭、「十二景詩」（六言絶句

十二首）を波響に送る。54歳。

十月、波響、「月下椋湖舟遊図」を茶山に送

る。55歳。

七月、波響入府。

四月、波響、松前志摩守章廣に随つて入府、

八月、梁川に在り。花亭は九・十月の交に波

響が入府するのを待っている。（岡本花亭の

菅茶山宛書簡、森鷗外『北條霞亭』所収）

十二月、松前復領を許される。58歳。

三月、波響 梁川を発つて松前に赴き、松前

奉行から旧領の引き渡しを受ける。藩校徽典

館創設される。59歳。

十月二十三日付けで岡本花亭が北條霞亭に宛

てた書簡に、「波響へ贈候数首有之」とある。

（森鷗外『北條霞亭』所収）

三月、家老を退任。60歳。

三月七日、浅草の感応寺で岡本花亭らと花見

六月二十二日歿す。享年六十三歳。

菅茶山没す。80歳。

①待花二首

辰二月廿一日一得齋詩会宿題

番風未度庭柯

番風いまだ尽きずして庭柯を度る

遅日人閑夕照過

遅日人は閑にして夕照に過ぐ

酒店詩樓待花意

酒店詩樓に花を待つ意は

更比幽鳥又猶多

更に幽鳥に比べてまた猶お多し

武陵桃李滿開時

武陵の桃李 滿開の時

新蝶告鶯成別離

新蝶 鶯に告げて 別離を成す

東奥真思是寒地

東奥は真に思ふ是れ寒地なりと

仲春更賦待花詩

仲春に更に賦す 花を待つ詩を

余 本月十日、東都を発し、十七日、帰郷す。都街の桃李は満開にして、桜花もまた將に綻ばんとす。因りて此の作あり。

※番風||花信風(開花の順番を知らせる風)のこと。一月

からの四力月間に一番から二十四番にわたって吹く。

※幽鳥||奥深い場所に住んで風流を愛する鳥。 ※武陵||

江戸の中国風の呼び方。 ※東奥||奥州梁川を指す。

②初夏

三春詩酒一狂顛

三春 詩酒 一に狂顛

顛尽如今方倦眠

顛尽きて 如今 方に倦眠す

衣釀先知霖属夏

衣は釀びて 先ず知る 霖 夏に属くを

杖閑猶思日如年

杖は閑にして 猶お思う 日 年の如きを

散紅窓裏残翅蟻

散紅の窓裏 翅蟻 残し

新緑梢頭敗紙鳶

新緑の梢頭 紙鳶 敗る

蚕種浴成老妻鬧

蚕種 浴成りて 老妻は鬧ぎ

少勤家事走桑田

少しく家事に勤めて桑田に走る

※狂顛||物に憑かれたように励む。 ※霖||長雨。梅雨。

※杖||春の行楽を共にした杖。 ※散紅||散った花卉。

※翅蟻||羽蟻。 ※紙鳶||凧。 ※蚕種浴成||浴蚕。 蚕種

を水に漬けて弱種を淘汰する。

③秋日郊行

樵夫担上添松蕈

樵夫の担上 松蕈を添う

行逐余香手欲摩

行くゆく余香を逐いて手もて摩でんと欲す

説示杖錢強莫買

説き示す 杖錢もて強いて買うこと莫かれ

吾儂箇是壽薪囿

吾儂は箇れ是れ薪を壽ぐ囿なりと

※樵夫の担上||きこりがかつぐ荷物の上。 ※松蕈||松た

け。 ※杖錢||杖の先に結びつけた財布の錢。 ※吾儂||

わたし。 ※壽||売る。

④抄冬小疾偶作 其二

敝身高举事何多

敝身 高く挙がりて 事 何ぞ多き

説利論名日靡他

利を説き名を論じて 日に他なし

早晚吾儂全宿志

早晚 吾儂 宿志を全うし

一舟風月臥煙波

一舟の風月 煙波に臥せん

※敝身||我が身。 ※高举||高位に登る。 ※説利論名||

名誉利益を追いかける。 ※宿志||かねてからの念願。

※早晚||いつか。

⑤ 歳晚即事

三百六句如奔輪 奔輪の如く

閑中忙裏忽移巡 閑中 忙裏 忽ち移り巡る

光陰難逐磨針業 光陰 逐い難し 磨針の業

活計何愁鋤鍬貧 活計 何ぞ愁えん 鋤鍬の貧

泉脈未通前寛凍 泉脈いまだ通ぜず 前寛 凍え

梅唇先放半枝春 梅唇 先ず放きて 半枝 春なり

不知得得老期近 得々たる老期の近きを知らず

歳歳待花与鳥均 歳々 花を待つこと鳥と均し

※奔輪 回る車輪。 ※閑中忙裏 暇でも多忙でも。

※光陰 歳月。時間。 ※活計 生計。 ※磨針 鉄杵を

磨いて針を作る。 ※鋤鍬 すぎと鎌。 ※泉脈 水の流

れ。 ※前寛 前庭のかけひ。 ※梅唇 梅の花。

※得々 心が満たされるさま。

⑥ 新築霞鶯軒四時閑詠十五首 其一

枕畝南瓜閑睡悠 畝に枕する南瓜 閑睡して悠なり

凌霜重葉似黄紬 霜を凌ぎ葉を重ねて黄紬に似たり

三竿日脚誰呼覚 三竿の日脚 誰か呼び覚ます

雀上頭顱鳴不休 雀 頭顱に上りて鳴きて休まず

※黄紬 黄色のつむぎ。 ※三竿日脚 竿を三本つない

だ高さに上った太陽。 ※頭顱 あたま。顱は、頭蓋骨。

⑦ 癸亥冬十月、至江戸道中、寓宿津軽原子村

山中日暮回凶程 山中 日暮れて 程を凶り回く

漸請田家旅次成 漸く田家に請いて 旅次成る

雪為替灯来隔映 雪は灯に替わらんが為に隔に映じ

川因兼井傍扉柴 川は井を兼ねるに因りて扉に傍いて柴ゆ

奴争孤縛縄床睡 奴は孤縛を争いて縄床に睡り

媪煖枯蕘粥鼎鳴 媪は枯蕘を煖きて粥鼎 鳴る

却喜埜翁没踈意 却た喜ぶ埜翁に踈意没く

鄰郷跨馬買醪行 鄰郷に馬に跨りて醪を買わんとして行くを

※癸亥 享和三年（一八〇三）。 ※旅次 旅の宿り。

※孤縛 一枚の蒲団。 ※縄床 むしろ。 ※枯蕘 枯枝。

※埜翁 田舎の老人。 ※踈意 嫌な表情。

⑧ 秋日朝後歩園

退公試歩散頑麻 公より退きて試みに歩いて頑麻を散ぜんとす

田圃未蕪滋滿遮 田圃 未だ蕪れず 滋満して遮る

路上乾蚯成字宛 路上の乾蚯 字を成して宛り

簷間鬪雀引徒加 簷間の鬪雀 徒を引きて加わる

千珠压朶熟红柿 千珠 朶を压して 红柿 熟し

半類埋沙老紫茄 半類 沙に埋もれて 紫茄 老ゆ

妻喚兒伝是何事 妻 兒を喚びて伝えしむるは是れ何事ぞ

鄰翁携酒已来過 鄰翁 酒を携えて已に来り過ること

※朝後 朝会の後。 ※頑麻 体のしびれ。 ※乾蚯 乾

いたミミズ。 ※压朶 枝もたわわに。 ※紫茄 ナス。

